


 巻頭言

## 日本から新しい情報技術を！



杉本 和敏

本会財務担当理事 日本アイ・ビー・エム(株)東京基礎研究所

会員の皆さんのなかには、「神々の指紋」(グラハム ハンコック)を読まれた方も多いことだと思う。南極大陸が発見されたのは19世紀にもかかわらず、2世紀から16世紀に編纂された世界地図の多くに南極大陸が描かれていた不思議、インカ、マヤ、エジプト文明には信じられないほど高度な建造技術、科学や天文学の知識があった不思議、エジプトのギザのピラミッド群が1万2千年前の天体図と一致している不思議などから説き起こし、現在いわれている文明よりもはるか昔の1万数千年前に南極大陸に栄えた文明があったのではないかという壮大なスケールの仮説を立てている。その真偽のほどは定かではないが、私たちの近代科学文明を見つめ直すきっかけを与えてくれたような気がする。

1800年のボルダの電池、1876年にベルの電話、1879年にエジソンの白熱電灯、1885年にタイマーの二輪自動車とベンツの三輪自動車、1903年のライト兄弟の飛行機など私たちのまわりにあるほとんどすべての技術は、このわずか200年の間に開発されている。情報技術分野を眺めると、世界で最初に開発された電子式のコンピュータは1946年のENIACで、プログラム内蔵方式は1950年ごろのEDVACやEDSACであり、コンピュータの誕生からわずか50年しか経っていない。この期間のコンピュータの高速化、小型化、高機能化、通信との融合などのための技術の進歩は著しい。今では家庭からや出張中のホテルからもネットワークに接続し、イントラネットやインターネットにアクセスできるようになっており新たな時代を迎えようとしている。

いま、机の上に30cmの定規を用意したとして、定規の左端を1万5千年前とするとこの近代科学文明の200年は定規の右端からたったの4mmの長さ、コンピュータの誕生からの50年はたったの1mmの長さにしかならない。この短期間にな

んと急速な進歩を遂げてきたのだろうか！ 私たちはとてもエキサイティングな時代に生きていると実感する。さらに、その定規をわれわれの未来の方向に30cmずらしてみるとこの先の1万5千年後を誰が想像できるのだろうか？ これまでの技術進歩のスピードからは10年後を予測することさえ大変難しい。はたしてこれまでと同じスピードで技術は進歩していくのだろうか？ どんな新しい技術が生まれてくるのだろうか？ 古代の人がピラミッドを残したように、私たちは未来の人にいったい何を残していけるのだろうか？

情報技術の将来は、この分野の研究・開発に携わる本学会の会員の皆さんの力にかかっている。今、私たちはネットワーク・コンピューティングの時代の入り口に立ったばかりである。インターネットだけでもパフォーマンスやセキュリティなどの多くの基本的な問題が散在しているし、その応用分野の開発はまだこれからである。インターネットやJAVAなど世の中を変えたような新しい技術をぜひ日本から生み出していきたい。そのためには、本学会が中心的な役割を果たさなければならない。現在、理事会では学会の将来ビジョンを討議し改善活動に努力しているが、学会としてできることには限界がある。重要なことは会員の1人1人が積極的に研究会、シンポジウム、セミナー、全国大会などに参加し、学会活動を盛り上げていってもらうことだろう。ネットワーク・コンピューティングの時代にこそヒューマン・ネットワークが重要だと思う。学会が提供する場を利用して、ヒューマン・ネットワークの中から真の情報をつかんだり、将来の情報技術について自由に議論をしてもらいたい。そのような活動の積み重ねが大きなパワーとなって日本が将来の情報技術に大きく貢献していけるように思う。

(平成9年3月31日)